

## 解題 オンライン版後藤新平文書の意義

伏見岳人（東北大学教授）

本資料集は、既刊の「マイクロフィルム版後藤新平文書」（水沢市立後藤新平記念館編、雄松堂書店発売、1979年）や『後藤新平書翰集』（DVD版、奥州市立後藤新平記念館編、中京大学社会科学研究所台湾史研究センター編集協力、雄松堂書店制作・発売、2009年）を底本としつつ、新たに奥州市立後藤新平記念館で発見・収蔵された資料や、公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所に所蔵されている関係資料などを収録したものである。

後藤新平（1857-1929）の文書は、その伝記編纂事業で収集・整理されたものを原型とし、伝記での時期区分に基づいて体系的に分類されている<sup>1</sup>。すなわち、故郷の水沢時代から始まり、医師として歩んだ須賀川・名古屋時代が続き、公衆衛生に励んだ内務省衛生局時代が来るものの、相馬事件での勾引・失職を経て、日清戦後の陸軍臨時検疫所時代で復活する、というように、後藤の歩みに即して各資料が配置されている。分量が多くなるのは、台湾民政長官時代（1898-1906）と満鉄総裁時代（1906-1908）であり、その後には、第一次・第二次通相時代、立憲同志会関係、寺内内閣時代、鉄道広軌関係、大調査機関関係と、国政で台頭していった過程が再現されていく。1920年に東京市長に就任し、1923年の関東大震災後には帝都復興院総裁として復興に尽力したことはよく知られている。そのほか、ソ連との国交回復交渉や政治の倫理化運動、さらには少年団運動などにも関与した。こうした軌跡にそって、後藤の手元には、膨大な講演筆記や覚書、パンフレットや意見書、日記、そして関係者から届いた書簡などが残され、歴史資料として保存されていった。

これらの大部分は、既刊の資料集などで、すでに多くの研究者に利用されてきた。しかし、2010年から2012年にかけて後藤新平記念館で全点調査が行われた結果、マイクロフィルム版には未収録の資料がかなりの分量で見つかった。そこで、マイクロフィルム版未収録のものは各時代区分の中にそれぞれ追加しつつ、明らかに異なる時代区分内にまぎれていた資料は「雑（外）」との項目を立てて、このオンライン版後藤新平文書に新規収録されることになった。マイクロフィルム版未収録資料の概数は、たとえば台湾民政長官時代960点中の240点、満鉄総裁時代220点中の50点、震災内閣時代140点中の80点が該当し、新規収録の「雑（外）」の数は160点におよぶ。さらに、近年に後藤新平記念館に寄贈された少年団関係資料などや、これまでほとんど知られていなかった後藤新平伯伝記編纂会資料、そして後藤・安田記念東京都市研究所や市政専門図書館に所蔵されていた資料なども、このたび包括的に収録される運びとなった。

以下では新規収録資料のうち、特徴的なものをいくつか紹介したい。第一に、後藤新平伯伝記編纂会の関係資料である。後藤没後に結成された伝記編纂会は、後藤家に残された資料を収集するのみならず、後藤が関係した19団体<sup>2</sup>などにも資料提供を求めた。この過程で台

湾慈善婦人会が集めた伝記資料 11 冊や、同じく日本衛生会（現在の日本公衆衛生協会）関係の 4 冊は、いずれも市政専門図書館に所蔵されており、当時の報道記事などを豊富に書き取ったものである。また、編纂会事務局が謄写した後藤の意見書や書簡などの筆記も充実しており、すでに一部散逸してしまった資料については、これらを通じて復元できる可能性も出てきた。さらに全 4 冊の「後藤新平伯伝記編纂会日誌」には、1930 年 12 月 3 日から 1937 年 8 月 14 日まで、事務局の動きが詳しくつづられている。この日誌には、伝記編纂会会長であった斎藤實が凶弾に倒れた二・二六事件当日の緊迫した状況も記されている<sup>3</sup>。こうした伝記編纂会資料を通じて、この浩瀚な伝記の編纂過程そのものを詳細に追跡することが初めて可能になった。

第二に、少年団運動の関係資料である。1922 年 4 月、東京市長だった後藤は、イギリス皇太子（後のエドワード 8 世）の来日を祝う少年団日本ジャンボリーに総裁として参加して以来、東京連合少年団団長や少年団日本連盟総裁（1924 年からは総長）に就任して少年団運動の拡大に尽力した。後藤の伝記にはこれらの関連資料が利用されているにもかかわらず、「マイクロフィルム版後藤新平文書」には、ごく僅かなものしか収録されていなかった。ところが、2016 年にボーイスカウト日本連盟に所蔵されていた関係資料が後藤新平記念館に寄贈され<sup>4</sup>、最初に発見した圓入智仁氏によって、その中の後藤の講演筆記や、関東大震災直後の「野外少国民学校」に関する文書を使った論考が発表されている<sup>5</sup>。これらの関連資料には、ほかにも少年団組織の規約案や諸報告、全国各地の活動記録など、当時の実態を伝える様々な文書などが含まれており、今回の収録で多くの利用者に提供されるようになった。

第三に、後藤・安田記念東京都市研究所および市政専門図書館に所蔵されていた資料である。1922 年 2 月に設立された東京市政調査会は、東京市長の後藤が会長を務めた調査研究機関であり、伝記編纂用の後藤家の資料を第一義的に保管する役割を担っていた。それゆえに、後藤の伝記資料の一部については、直系の後継組織にあたる後藤・安田記念東京都市研究所と市政専門図書館に所蔵される経緯をたどった。今回のオンライン版後藤新平文書に収録された資料には、後藤の論考や訓示、講演などの記録に加え、帝都復興院・帝都復興聯合協議会・臨時震災救護事務局による関東大震災後の復興に関する冊子体が多く含まれている。内務大臣の後藤が震災直後に提出した「帝都復興ノ議」などは、すでに同研究所のデジタルアーカイブスとして公開されていたが<sup>6</sup>、このたびのオンライン版収録によって、他の資料と組み合わせる立案過程をさらに多角的に検討することが可能になろう。また、これまで収録されていなかった東京市政調査会関係資料や、1922 年から 1923 年にかけて二度日本を訪問したアメリカの歴史学者・政治学者 Charles A. Beard の調査活動に関する資料も、今回新たに公開されることになった。

以上のまとまった新規収録資料に加えて、「マイクロフィルム版後藤新平文書」を補完する資料も多く盛り込まれている。たとえば、後藤新平の日記は、ドイツ留学中の 1892 年から最晩年の 1929 年まで、欠落を挟みながら断続的につけられており、マイクロフィルム版

でも閲覧可能だったが、今回新たに1893年と1911年の二つの日記等が追加で収められた。内務省衛生局長に就任して間もなく、相馬事件に連座して失職してしまう1893年の日記は、相馬事件における「家宅搜索押収物件」と分類されていた書類束を調査する過程で、新たにその存在が判明した<sup>7</sup>。1911年の日記は小型の手帳であり、桂太郎内閣総理大臣が政友会幹部の原敬たちと交渉したことを受けて、後藤の提案した鉄道広軌化計画が断念させられた過程などが記録されている。この他にも、いくつかの日記が今回新たに収録されている。書簡についても、台湾民政長官時代の中に、福建地方の情勢を伝える沢村繁太郎の書簡が複数発見されたほか、満鉄総裁時代において中村是公満鉄副総裁をはじめとする諸方面からの書簡が新たに確認された。いずれも『後藤新平書翰集』には含まれていない書簡である。

そして、既述の通り、マイクロフィルム版で未収録だった資料がかなりの分量となる。その点数の比較的多い台湾民政長官時代については、マイクロフィルム作製時に、まとまって撮影されなかった経緯が判明している。『マイクロフィルム版後藤新平文書目録』（水沢市立後藤新平記念館編、雄松堂書店刊、1980年）の「七、台湾民政長官時代」には、115項目の資料群が、ちょうど14リール分に区切りよく収録されている。しかし、後藤新平記念館の記録をみると、この115項目に続いて、さらに14項目の資料群が存在していたものの、「内容重複のため」撮影しなかったことを確認できる<sup>8</sup>。この14項目は、「A 台湾各地方概況、B 台湾総督府史編纂関係、C 阿片問題雑、D 台湾産業関係雑、E 台湾電気事業その他、F 台湾司法警察関係、G 台湾総督府意見書その他(1)、H 台湾総督府意見書その他(2)、I 「殖民及殖民政策」その他殖民地論、J 台湾総督府財政関係(I)、K 台湾総督府財政関係(II)、L 一般雑(I)、M 一般雑(II)、N 一般雑(III)」の通りである<sup>9</sup>。確かに、類似した内容の資料はマイクロフィルム版に一部含まれるものの、この14項目に該当する181点の資料はそれぞれ独自の意義を有すると考えられ、今回、一部の印刷物を除き、ほぼ全てが追録されることになった。

このほかにも、「マイクロフィルム版後藤新平文書」の全時代区分にそって、それぞれ未収録資料を網羅的に追加する措置が施されている。また、白黒二色のマイクロフィルム版ではわからなかった原資料上の赤字の書き込みなども、今回のオンライン版では識別できるようになった。これらの新規資料を数多く含んで、今回「オンライン版後藤新平文書」として、あらためて世に提供されたのである。

以上の膨大な資料群は、後藤の伝記編纂事業から今日まで、幾重もの整理・保管を経ることで残存してきた<sup>10</sup>。まず、1930年12月に伝記編纂事業が始まると<sup>11</sup>、玉井広平や田辺定義が材料収集に着手した<sup>12</sup>。両者はそれぞれ途中で幹事を辞するものの、後藤新平文書の原型を形成した功績はまちがいなく彼らにある。また、最初期から最後まで編纂会の事務局に関与した飯塚巖の役割も欠かすことができない。他にも、水村正一、日野資誠、都倉義一、星野小次郎らが嘱託として収集・整理にたずさわり、後半期には鶴見祐輔のもとで澤田謙、滝川政次郎、井口一郎も新たに関わった。後藤家から移された大量の書類等は、後藤の姪に

あたる清野富美子とその夫で医学博士の清野謙次が住む京都に運ばれ、2年以上かけて分類・整理されていく<sup>13</sup>。これらに加えて、編纂会は後藤の関係者に幅広く談話を聞きとり、関連団体に資料提供をたびたび求めていった。後藤新平の伝記は1937年3月から順次発行され、1938年8月の第4巻の刊行後、同年10月末をもって編纂会は解散にいたる。

伝記編纂事業が完了したのち、後藤新平文書は長らく市政会館で保管されることになった。さらなる資料整理に従事すべく、伝記編纂会の後継組織として後藤新平伯関係文書処理委員会が設けられ、一年以上の精査を経て、1939年11月付で『後藤新平伯関係文書目録』が完成する<sup>14</sup>。この目録は、伝記での後藤の時期区分に準じて、番号順に資料の名称を一点ずつ明記した500頁を超える大作であり、ここでの区分法が今日の後藤新平文書の分類法の基礎をなしている。これを成しとげた飯塚巖と星野小次郎の労苦は特筆に値しよう。その後、後藤の資料は市政会館内で保管されていくが、資料の一部については後藤の関係した団体等に寄贈されたようである<sup>15</sup>。また、戦後になって後藤家へ返却あるいは廃棄されたものも存在する<sup>16</sup>。そして、1961年10月に、市政会館8階に後藤伯記念室が設けられ、資料の長期保存と研究者への閲覧提供が制度化していった<sup>17</sup>。

こうした経過ゆえに、『後藤新平伯関係文書目録』には記載されているものの、所在不明の資料も残念ながら発生している<sup>18</sup>。1966年と1971年には国立国会図書館憲政資料室によってマイクロフィルム化され<sup>19</sup>、その際には市政会館内の所蔵確認も行われた。国立国会図書館憲政資料室所蔵の『後藤新平伯関係文書目録』には、おそらく1966年時点での所在確認によって、かなりの量の資料について「欠」という記録がされている<sup>20</sup>。ただし、その「欠」の中には、たとえば後藤新平日記など、のちに所在が確認されたものも含まれており、この時の調査漏れによる「欠」扱いも相当量あったようである。

これに続く全点調査は、後藤新平記念館の設立にともなう東京から水沢への資料の移管過程で実施された。1975年に水沢市（当時）から要請があり、1977年12月1日に、後藤新平文書の大部分は水沢に移管された。ただし、市政専門図書館に登録されていた蔵書や、寄贈済みの東京市政調査会の関係資料等については、市政会館内に引き続き所蔵されることになった。この移管の準備段階から1978年9月7日の後藤新平記念館の開館までの間に、東京と水沢の双方で、資料の全点調査が実施されている。それにより、市政専門図書館と後藤新平記念館の双方にある『後藤新平伯関係文書目録』には、所在不明を示す「欠」の記録がそれぞれの該当資料にくまなく付けられていった。これらは、移管過程での散逸を防ごうとする関係者の強い責任感の刻印に他ならない。中には、1978年7月31日付で、田辺定義の指示により、市政専門図書館の目録上の「欠」の書き込みをごく僅かに修正したメモが添付されている<sup>21</sup>。伝記編纂事業の発足から半世紀近く経ってなお、後藤関係資料の管理を一手に引き受けていたという田辺の厳密さを物語るものであろう。

あわせて、水沢から遠方にいる研究者等の利用も鑑みて、雄松堂書店による「マイクロフィルム版後藤新平文書」が作成された。開館から間もなく雄松堂書店の横山勝行が水沢を訪問して企画を提議し、1979年6月12日から9月21日までの約3ヶ月間で、マイクロフィ

フィルム撮影が実施された<sup>22</sup>。既述の通り、未収録の資料は確かに生じているものの、開館後の慌ただしい状況下で、大量の資料撮影を水沢で短期間で実施したことの功績をやはりたたえるべきであろう。同年 11 月 24 日、完成したマイクロフィルムと映写機（マイクロリーダー）が後藤新平記念館に寄贈され<sup>23</sup>、翌 1980 年 2 月に『マイクロフィルム版後藤新平文書目録』も刊行された。この目録は、前述の『後藤新平伯関係文書目録』のうち、移管過程の調査で「欠」扱いとなった資料を削除して構成されている。これらが全国の図書館等に所蔵され、多くの研究者の目に後藤新平文書が触れる機会となったのはまちがいない。

その後も水沢での資料原本の調査がたびたび行われ、後藤新平文書に関する分析も深まっていった。たとえば書簡については、全体量の約 50%のみがマイクロフィルム版に収録されていたことが、のちに中京大学社会科学研究所のグループによって明らかになった<sup>24</sup>。そこで、全ての書簡を盛りこんだ DVD 版の『後藤新平書翰集』が 2009 年に刊行されるとともに、従来のマイクロフィルム版をもとにする DVD25 枚の「後藤新平文書デジタル版」（雄松堂書店制作・発売）も同年に登場した。その際には『マイクロフィルム版「後藤新平文書」収録目録 改訂版』（雄松堂アーカイブズ株式会社、2009 年）も作成されている。

そして、2010 年から 2012 年にかけて、後藤新平記念館で行われた全点調査により、マイクロフィルム未収録資料の全体像が把握されていった。その背景には、2007 年の後藤新平生誕 150 周年に際してさまざまな研究活動がくり広げられ<sup>25</sup>、全国から資料に関する問い合わせが記念館に寄せられたことがある。地元からの緊急雇用者のべ 4 名の協力のもと、膨大な書類を対象としたこの調査はたゆまず続けられていく。それによって整理された目録データの存在なくして、今回のオンライン版後藤新平文書プロジェクトが発足することは決してなかった。この全点調査やデータ再整理を主導された後藤新平記念館の歴代館長の方々（及川正昭様、千葉章様、高橋力様）と、現任の佐藤彰博館長、中村淑子学芸調査員、佐々木菖子学芸調査員、また奥州市教育委員会の高橋和孝学芸員のご尽力を、特に強調して記しておきたい。

このように、後藤新平文書は、後藤の足跡を後世に伝えようとする数多くの後進の手によって引き継がれてきた文化遺産である。近代日本政治史の中でも、屈指の質と量をほこる資料は、これらの地道な蓄積によって成り立ってきたのである。そして、このたびのオンライン版後藤新平文書の刊行によって、水沢や東京との地理的距離をこえて、どこからでも後藤新平の資料に直接アクセスできるようになった。これまで各地に分散されてきた後藤の資料は、ようやく一つの場所に統合して参集できるようになる。これが、今後の後藤新平研究をさらに発展させていく豊かな土壌になることは明らかであろう。

公衆衛生、植民地経営、震災復興など、いずれも前例のない事業に取り組み、世界の中の日本を説き続けた後藤新平の仕事に関心を寄せる者は、日本国内はもちろんのこと、海外にまで広がっていくはずである。このオンライン版後藤新平文書が、そうした幅広い利用者の手に触れられていくことを心から応援していきたい。

- <sup>1</sup> 鶴見祐輔編著『後藤新平』全4巻（後藤新平伯伝記編纂会、1937-1938年）。1965年に勁草書房より全4巻で復刻された後、2004年から2006年にかけて藤原書店より、鶴見祐輔著、一海知義校訂『正伝後藤新平』全8巻として出版された。
- <sup>2</sup> 日露協会、日独文化協会、日独協会、日本放送協会、日本性病予防協会、都市研究会、東洋協会、東京市連合青年団、東京市連合少年団、東京市政調査会、東亜経済調査局、台湾倶楽部、台湾婦人慈善会、拓殖大学、帝国鉄道協会、逓信協会、電気普及会、南満洲鉄道株式会社、少年団日本連盟である。
- <sup>3</sup> 「二・二六事件記録 新平資料群から見つかる」『胆江日日新聞』2020年2月5日付。
- <sup>4</sup> 「後藤新平ボーイスカウト資料 晴れて記念館で保管」『胆江日日新聞』2016年3月19日付。「後藤新平とボーイスカウト 連盟寄贈 新資料を公開」『胆江日日新聞』2016年5月8日付。
- <sup>5</sup> 圓入智仁「少年団による関東大震災後の活動—『野外少国民学校』の取り組み—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』49号、2017年、111-116頁。圓入智仁「後藤新平による少年団運動への関わり」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』51号、2019年、41-47頁。圓入智仁「後藤新平の少年団教育思想」『社会教育学研究』55巻、2019年、1-10頁。
- <sup>6</sup> <https://www.timr.or.jp/library/docs/1923/1923-13.pdf>
- <sup>7</sup> 1893年10月25日と10月30日に東京地方裁判所予審判事によって押収された書類の中に含まれており、「マイクロフィルム版後藤新平文書」5-12「家宅搜索押収物件」にはこの日記は収録されていなかった。
- <sup>8</sup> 後藤新平記念館所蔵の『後藤新平伯関係文書目録』104-105頁に挟まっていたメモに、当時の田中吉男館長が手書きで記していた。
- <sup>9</sup> 便宜上、いくつか表記を修正してある。これらの14項目を記したメモは、市政専門図書館所蔵の『後藤新平伯関係文書目録』にも添付されており、おそらく市政専門図書館のものが原本で、後藤新平記念館のものはそれを書き写したものと推察される。
- <sup>10</sup> 後藤新平文書の来歴に関する先行研究は、以下のものが挙げられる。季武嘉也「後藤新平」、伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典』（吉川弘文館、2004年）170頁。田村靖広「女婿・鶴見祐輔の『後藤新平』—後藤新平研究の系譜—」、『都市問題』98巻9号、2007年、36-37頁。春山明哲「『後藤新平伝』編纂事業と〈後藤新平アーカイブ〉の成立」、春山明哲『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究』（藤原書店、2008年）364-379頁。檜山幸夫『後藤新平文書中後藤新平書翰ならびに後藤新平関係書翰の電子情報化資料版による刊行について（後藤新平記念館所蔵 後藤新平書翰集 解説）』雄松堂アーカイブズ株式会社、2010年、1-41頁。
- <sup>11</sup> 以下、伝記編纂事業での資料収集・整理作業については「後藤新平伯伝記編纂会日誌」を主に参照した。

- 12 玉井広平は社会問題や教育問題などの文筆家であり、『雄弁』20巻6号（講談社、1929年）178-180頁の「故後藤伯爵追悼会に於て」という文章の中で、仙台同郷会などでの後藤との縁を記している。田辺定義は、東京市職員として東京市政調査会の発足に関与し、戦後には会長も務めた人物である。（佐藤澄夫『評伝田辺定義』時事通信社、2005年）。
- 13 清野富美子は、後藤の妻和子の姉、安場トモの次女にあたる。また、清野謙次は考古学や人類学の資料収集でも有名な人物であった。清野富美子「新平叔父の思い出」『後藤新平月報1』（勁草書房、1965年）6頁も参照。
- 14 限定19部の刊行であり、後藤新平記念館や市政専門図書館、国立国会図書館憲政資料室で所蔵が確認されている。
- 15 『財団法人東京市政調査会六十年史』（東京市政調査会、1982年）48頁。
- 16 市政専門図書館にある『後藤新平伯関係文書目録』372頁には、「昭和二二年一〇月一〇日 第一号ヨリ第二一三号マデ後藤家へ返却又ハ廃棄ノタメ常務理事へ引継グ」との記載がある。これは目録上の「三〇 来訪者名簿及其他諸帳簿目録」を指している。市政専門図書館の田村靖広氏のご教示による。
- 17 前掲『財団法人東京市政調査会六十年史』48頁。
- 18 田辺定義が作成した『後藤家図書・文書・物件類委託保管に関する記録』（財団法人東京市政調査会、1978年）7頁には、次のように所在不明資料について記されている。「文書類のうち、外務省・国会図書館等が複写される場合にはすべてこれに応じ、また政府機関その他に対し文書そのものの寄贈を適当と認めたものについては、できる限りその申入れに副うことにした。調査会が東京市政関係のもの寄贈を受けたこと等はその代表的なものである。昭和一四年一一月現在をもって作製した「後藤新平伯関係文書目録」はその時点においての全文書を網羅したものであるが、その整理によって「欠」を冠したものはだいたいにおいてそれが寄贈であることを示している」。この記録は、後藤新平記念館所蔵の複製版を閲覧させていただいた。
- 19 春山、前掲『近代日本と台湾一霧社事件・植民地統治政策の研究』371頁。なお、1966年には書類の部と書翰の部のア部～エ部までの75リールが作成され、1971年には残りの書翰の部のオ部以降の17リールが撮影された。書翰の部については、途中から重要人物については「書翰の部Ⅱ」「書翰の部Ⅲ」として、1971年の撮影時に再録する方針をとったようである。
- 20 この目録の所在は春山明哲氏にご教示いただいた。記して御礼申し上げたい。
- 21 『後藤新平伯関係文書目録』の「三四 諸勘定類」のうち、一部の「欠」資料の所在が確認された趣旨の修正である。田村靖広氏のご教示に御礼申し上げる。
- 22 1978年9月20日に横山が後藤新平記念館を訪問し、同年12月12日付でマイクロ撮影の許可申請がなされ、後藤新平記念館で資料の再点検を数ヶ月行ったのち、契約が締結された流れである。後藤新平記念館の中村淑子氏のご教示による。
- 23 『後藤新平記念館 沿革誌』（後藤新平記念館所蔵）5頁。
- 24 檜山、前掲『後藤新平文書中後藤新平書翰ならびに後藤新平関係書翰の電子情報化資料

版による刊行について（後藤新平記念館所蔵 後藤新平書翰集 解説）』9頁。

<sup>25</sup> 「ミニ特集後藤新平生誕 150 年」『新都市』（61 巻 7 号、2007 年）、『『都市問題』・後藤新平生誕 150 周年記念 8 月号特別増刊 後藤新平・「大風呂敷」の実相』『都市問題』（98 巻 9 号、2007 年）、「特集 生誕 150 年後藤新平—東京をデザインした男」『東京人』（22 巻 11 号、2007 年）、「2007（平成 19）年度関東都市学会春季大会シンポジウム『帝都復興』再考—後藤新平生誕 150 周年』『関東都市学会年報』（10 号、2008 年）など。また、藤原書店による「後藤新平の全仕事プロジェクト」の一環として、前掲の『正伝後藤新平』全 8 巻が刊行された。